

# 新春文芸

## 新春に詠む短歌

統廃合の歴史なつかし校歌弾く「宝篋小野に竜ヶ峰」の春

荒井 洋子

思い出の山ノ荘小学校も廃校となり新校舎に三校統合の春。故郷の山は変わらず雄大に見守ってくれている。

朝光を受けし吾が身も黄昏れて輝く一年神にあづけん

和氣 明美

朝日に向い手をあわす。若いと言いつつも老いは日においかけてくる。希望を持って、すべてを神にゆだねて生きる。

正月のために蒔きたる菜の花のはつかな黄色椀だねに摘む

菊田 智子

毎年正月間に合つよつに菜の花の種を蒔くことにしています。なにせ幸せの黄色い花ですから…。

振袖に若人賑わう初詣で春日大社の参道行き交う

腰山 佑子

正月に奈良へ旅をし初詣でした。訪れた周辺の社寺ごとも和服姿の晴れやかさが目立ちお正月気分を満喫した。

高く咲く野のコスモスに選挙カーの連呼の声の虚ろな響き

佐藤 哲子

此の度の選挙は特に離合集散の激しさを感じました。政治にかかわる事は崇高な仕事と思つが、国民の為にお願いします。

マンションの二十階の窓に立ち富士見しこともけふのよろこび

瀬古澤 和子

先ず富士山を仰ぐことより私の一日が始まります。すつくと立つ美しさは感動と元気を与えてくれます。

寝積みの子らは布袋のやうな顔そつと布団をかけなほしやる

根本 晴市

寝積みとは、忌み言葉のひとつで元日に寝ることを言う。子どもらは夢の中で、布袋に会っているのかも知れない。

手づくりのお節の好きな孫の顔思ひことと黒豆煮をり

酒寄 広子

孫達は私の煮物が大好きです。喜ぶ顔を思い浮かべながら今年もお節をつくっています。

土浦に土地買ひ家を建てて佳し田仕舞の蛙に鼈振り向く

栗田 幸一

土浦に移り住んで三十五年。故郷の古河の倍を生き、花室川の情景を歌にし、終の住処となる。

香 かおる春の茶室にさ緑の薄茶の清くのみどに甘し

渡部 克美

若い頃ある流派の初釜に出たことがある。香の薫る茶室での一服のお薄の清々しかつたことは今も忘れられない。

友よりの手書きの賀状読み返す凍れし道も今はなつかし

生稲真理子

故郷の北海道では凍れることを、凍れると言います。幼少の頃は滑らない様に歩くのに苦労しましたが、楽しんで思ひ出します。

寒さが好きと咲けるわびすけ蹲いに花を浮かべて真昼しずけし

井上 寛江

つす紅色の侘助椿が姿を崩さずつくばいの水に浮いている。この静かな風情に再び戦争の起きないことを祈るのである。

屈りて片栗の花咲くを見つ筑波のなだり雪のあわいに

松崎 國男

早春の一日。筑波山に行った折りの作である。限らない感動を与えてくれた一首である。

蒼天に自転車漕ぐ少年のわたちのような飛行機雲が

井上 秀子

少年は懸命に自転車を漕いで通り過ぎた。心地好い風を残して。今でも、飛行機雲を見ると、あの時の少年を思い出す。

透き徹る御空に聳ゆる筑波嶺は万葉びとも拝みあらん

櫻井 雅江

初春の筑波嶺を仰ぎ見ると、澄み渡る大空にくっきりと聳え立つ。崇高さに、万葉びとも合掌した事でしょう。

朝つゆの堤に立てば白、白、白、一望千里蓮の花咲く

菊地 公代

八月の早朝、霞ヶ浦沿線の堤より眺めた蓮田は、純白の花が咲き広がり、蓮田の海のような風景でした。

# 新春に詠む俳句

朱き実に同じ鳥来るお正月

南天・万両・千両・もちの実などの朱が彩を添える冬。今年もいつも来る鳥たちが賑やかにやってきた。元気に一年を過ごそう。

狩谷 諭

初夢のちははは今も笑いおり

「一富士二鷹三茄子」。縁起の良い夢を順に並べた諺。特に新年の初夢に。一説に駿河の名物とも。でも最高の初夢は父母のことだ。

高田 智子

顔合わせにここに嬉しお年玉

普段はなかなか来ない孫たち。お正月には必ず顔をそろえる。お年玉をもらって大喜び。元気に育ってくれることを切に願う。

土田 信子

寒雁の群れ轟くや日の出前

郷里の伊豆沼は十萬羽の雁や白鳥が越冬する。空が明けると、一斉に鳴き交わしながら飛び立つ光景は身震いするほど感動的だ。

土屋佐奈江

波静か万福運び初日の出

澄み渡る水平線。ぐんぐん上がる初日の出。その輝きは崇高だ。それは人々の願い、希望を運んでくるように。一年を輝かせよう。

増田 洋子

繭玉の揺れる蔵町通りかな

繭玉は正月の縁起物。繭の収穫を願った養蚕の名残りも、いまは商店街の軒下で華やかに揺れ、年祝きの風物詩となり客を呼ぶ。

山根 延子

肉筆へまず目が行くや年賀状

年賀状はほとんどが印刷されているが、そこに「お元気ですか」の一言でも手書きの字があると達筆でも癪子でも嬉しさが増す。

山本慶吉郎

新しき年迎えたる湖光かな

心地よい緊張感。そして無事に新年を迎えられたことを喜び、感謝して過ごしたい。安心して暮らせる世界の平和を願う。

吉田 博子

# 新春に詠む川柳

ミサイルの飛び交う浦も初日の出

北の技術が進歩し日本の上空は通り道になってしまった。新聞が騒ぐほど実害はないが穏やかな初日が拝めるよう祈るばかりだ。

田邊 余市

「ながきよの……」歌を枕にお正月

元日の夜、良い初夢を見る様にと父が書いてくれた回文歌。それを枕の下に敷いて寝た正月の思い出。子や孫に私も書いてあげる。

石引たか女

初夢は富士の雄姿と決めておく

毎年平凡な正月を迎えているので、今年こそ良い運に恵まれるよう富士の雄姿を見ようと決心した。

後藤 建坊

初詣で小さいけれど夢ひとつ

生きている限り、何か目指すものを持ち続けたい。たとえそれが他愛ない、ちっぽけなものであることも。

高木ひろし

母の味受け継ぐ雑煮修行中

作り方を聞いても自分量よと笑う義母と同じ材料で作ってみても何かが違う。雑煮好きな夫の為に母の味に近付きたいと思う。

山本千栄子

千支同じ曾孫を抱いて母笑顔

母は初めての曾孫が同じ千支なのを喜んでる。次回の千支も一緒に元気に迎えてほしい。

久保田莉凡

わかさぎのお頭つきでお節重

大晦日になると大き目の焼公魚を買って来てお節重の中央に堂々と盛り付ける。公魚と目が合った。明けましておめでとう！

浅野ゆき子

二世帯のおせち分け合う初春の膳

キッチンの違う二世帯同居、せめてお正月べらひは老若好みのおせちを分け合っって同じ食卓でいただくのも家庭田満や言ひもの。

谷藤美智子